



Title	Moon Catcher : 月を楽しむための飾りテーブル
Author(s)	星野, 祥子
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86318
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Moon Catcher

月を楽しむための飾りテーブル

星野 祥子

はじめに

日本人は月を好む民族であると言われ、日本の文化芸術の格好のテーマとなってきた。特に、銀閣寺や桂離宮といった月を見るために綿密に計算された建築は、観月文化の高次の結晶として広く知れ渡っている。筆者は現代に合った月の楽しみ方を提案することで、私たちの中に息づいている日本人独特の価値観を呼び覚ませないか研究を続けている。今回は、月の光を漆塗りの天板に反射させ、その投影を眺めるための飾りテーブル「Moon Catcher」のデザイン提案を行う。

研究方法

実寸大のプロトタイプ制作を通してデザイン検討を行った。デザイン検討プロセスを通して考察を行う。

デザイン検討

デザインスケッチを起こす前に、まずは日本固有の価値観を肌で感じることから始めようと思い、奈良県大和郡山市の臨濟宗大徳寺派の寺院、慈光院を訪ねた。慈光院は茶道石州流の祖である片桐石州が寛文3年(1663)に領地内に建てた寺院で、境内全体が一つの茶席としてつくられている。書院の前の庭園はサツキの大きな丸刈り込みと数種類の木々と手水鉢で構成されており、その背後にはかつて石州の領地であった景観が広がっている。

この庭園の魅力は、書院から庭園そして景観と、建築の内と外が一体となり調和している姿である。調和をもたらす要素としては、内と外をつなぐ役

割を果たす深い軒下と、視界の中で交差する直線とゆるやかな曲線の程よいバランスが挙げられる。



軒下については、伊藤ていじがその空間的性格は「つなぎ」の役目であると記している。

「(省略) …人間がつくった空間としての建築と、自然がつくった空間としての山川草木森羅万象とが静かにふれあい、手を結びあい、交流する場所であった。また言葉をかえれば、庭と建築という違った分野が互いに接触し、住む人たちに自然と人工の協力関係が、いかに心豊かなものであるかを教えてくれる空間でもあった。」(『日本デザイン論』鹿島出版会 1966年 pp.46)

また、乾正雄は日本座敷の光の流れについてこう分析している。

「障子で拡散された外光は、主として畳に反射して上に向かう。天井や壁には光をはねかえす力はほとんどない。通常の常識では、光は上から下へ注ぐのがふつうだろうが、日本座敷では光は下から上へ溢れ出るのである。」(『夜は暗くはないか ― 暗さの文化論』朝日新聞社 1998年 pp.27)

そして、宮元健次は銀閣寺の軒下の庇の裏に銀箔が施された可能性について触れている。

「それでは、なぜ軒下のみ銀箔を施す必要があったのだろうか。一言でいえば、「銀沙灘」や池に反射した月光をさらに軒下に反射させて家内にもたやすための仕掛けであったと推測している。」(『月と日本建築——桂離宮から月を観る』光文社 2003年 pp.177)

銀閣寺の庇裏に貼られた銀箔は、「銀沙灘」や池からの上方向の光を受けて、ぼうっと鈍く光ることにより、月明かりの存在を感じるための演出と捉えることができよう。

このように、日本らしい空間に足らしめているのは、内とも外ともとれない軒下の存在であり、屋内からの月見を実現させているのは、下から上へ向かう光の流れであると言える。

さて、現代の住宅で日本らしさをたたえた月見のあり方を模索するにあたり、前述のような日本建築空間の性格をふまえながら「Moon Catcher」のデザインを進めた。「Moon Catcher」をベランダや窓際に置いた際に月明かりが感じられるよう、天板には反射率の高い塗装がふさわしいと考え、呂色塗りを施すこととした。呂色塗りは漆塗りの中でも特に鏡面のように平らで、豊かな光沢のある仕上げである。そして、あえて木目を見せる木地呂色塗りとすることで柔らかな印象を与え、現代のインテリアにも馴染みやすくした。

形状については、随所になだらかな曲線を織り交ぜることにした。これらの曲線は、慈光院の庭園のサツキの大きな丸い刈り込みから着想したものだ。日本建築に表れる独特の曲線について、伊藤ていじはこのように記している。

「それらは人間が体系だてた幾何学のなかにもつけだされた曲線ではなくして、天地との間に存在する自然の曲線を人間がひきだした

ものである。」(『日本デザイン論』鹿島出版会 1966年 pp.12)

刈り込みのなだらかな曲線もまた、庭師の手仕事により自然との対話の中から生み出される。筆者はデザインを検討する上で、手書きによるスケッチや図面を描きながら形状を決定し、デジタル図面作成はあくまで補助的な作業として進めた。天板は制作技術に限界があり木工所や漆職人に発注したが、それ以外は自ら制作した。「Moon Catcher」が置かれる空間全体を想像しながら、少しずつ形状を修正し完成を目指すことで、庭師の手仕事を追従するように線を練り上げていった。

考察

このように、慈光院での総合的な体験をイメージの源とし、身体的な出力方法によって細部を決定していく事で、全体から日本らしさが匂い立つようなデザインに仕上がったと思う。

2021年9月後半には「Moon Catcher」の展覧会を予定しており、付帯イベントとしてプロトタイプを使った月見会も開催する。筆者の狙いがデザインに反映されているかどうか、そして鑑賞者がどのように感じるのか、引き続き検証を行いたい。

プロトタイプ制作協力

株式会社 上谷木工 株式会社 堤浅吉漆店

